

東北民謡を追いかけている。東日本大震災以降、東北の声を聴きたくなったのだ。

岩手県の民謡に「牛方節（南部牛追唄）」がある。その発祥の地は岩手郡葛巻町だと言われている。葛巻は北上山地の山間部にあるかつての宿場町だが、ここでは江戸期から馬や牛の放牧が盛んだった。周囲の山々に天然芝が広がっていたことによる。岩手県の牛方（牛の世話人）は、葛巻出身者がほとんどだった。

葛巻町から東の方向、険しい山道を三陸海岸へ四十数キロ下りると野田村がある。野田村は東日本大震災で壊滅的な被害を受けた。この野田と葛巻をつなぐ道路を「野田街道」と言い、かつては「塩の道」とも呼ばれた。

野田村は江戸時代から戦後初期まで、製塩事業で栄えていた。海岸の浜辺で大きな鉄鍋に海水を入れて煮る、というもつとも単純な製塩方法で、この地方の塩を一手に担っていた。その「野田塩」を牛の背に載せて北上山地を越えて運んだのが、葛巻出身の牛方たちだった。

田舎なれども 南部の国は
西も東も金（かね）の山

こいらんやあひ

プロフィール
詩人。1947年奈良県生まれ。同志社大学文学部中退。ミンガン州立オークランド大学客員研究員、東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文芸非常勤講師を歴任。著書に評論『中原中也』（筑摩書房、サントリー学芸賞）、詩集『蜂蜜採り』（書肆山田、高見順賞）、エッセイ『アジア海道紀行』（みすず書房、読売文学賞）、『人形記』（淡交社）など。編著に『新編中原中也全集』全6巻（角川書店）、最新刊に詩集『明日』（思潮社）。



民謡が口頭伝承であった時代

きさききみきろう
佐々木幹郎

牛を励ましながら、牛の歩みのリズムにあわせて「牛方節」はうたわれた。「西も東も金の山」というのは、南部藩は田舎だけれども、どの山からも砂金が出る土地だ、ということ誇っている。しかし文字だけで民謡の歌詞を追っていると、その歌詞が秘めている生活の感覚がわからない。牛方のほとんどは文字が読めなかった。民謡は口頭伝承で伝わっている。「金」をなぜ、「さん」とうたわずに、あるいは「黄金（こがね）」でもなく、「かね」とうたってきたのか。

昭和初年代にこの地方を門付けしていた盲目の津軽三味線の演奏者・初代高橋竹山（一九一〇〜九八）は、まったく別の解釈をしている。彼は牛方とともに山道を歩きながら、牛方にこう教えられたという。

牛にはアブやハエがいつも飛び回っていて、「ゴォーン、ゴォーン」と鐘のような音がしている。「西も東も金（かね）の山」というのは「西も東も鐘の山」のことだと。

初代竹山が「牛方節」をうたうときは、その生活感覚を匂わせてうたった。この「かね」の解釈は説得力があつて、砂金と解釈するのと同じくらい、牛方のロマンに満ちている。

月刊
みんぱく
5月号目次

1 エッセイ 千字文
民謡が口頭伝承であった時代 佐々木 幹郎

2 特集 博物館と博覧館

- 2 〈みんぱく流〉探究のすすめ 野林 厚志
- 5 電子メディア時代の博物館 飯田 卓
- 6 みんぱくと映像 福岡 正太
- 8 探究ひろばの情報化 中村 嘉志
- 8 イメージ・ファインダーの素 山本 泰則

10 研究フォーラム
「母国」に「帰国」した移民から故郷の意味を問う
奈倉 京子

12 みんぱく Information

14 みんぱくを離れるにあたって
宗教から世界を見る、世界から宗教を見る
みんぱくでの35年
中牧 弘允

16 連載リレー 知の収蔵庫
ボクシングの文化論 3の2
おれは最高だ！
櫻永 真佐夫

18 多文化をあきなう
生きることを大切にしておく店
鈴木 紀

20 異聞逸聞
バジャマと一張羅
小川 さやか

21 みんぱく私の逸品
百貨店店員用制服（ワンピース）
高橋 晴子

22 フィールドで考える
波の神を祀る人びと
吉本 康子

24 次号予告・編集後記